

記念講演

## 稼軒詞試論

村上 哲見

司会（松尾肇子）：それでは今から村上哲見先生に「稼軒詞試論」という題目で記念講演をお願い致します。具合が悪くなられて心配しましたけれども、来ていただけで本当に嬉しく存じます。先生は今さら紹介の必要もないかとは思うのですけれども、日本で詞の研究の先鞭をつけられ、いま私たちはそのご恩を受けて後に続けたいと思っている者ばかりです。これまで北宋詞については創文社から大きな本が出ていますが、南宋の詩余につきましては姜夔（白石）・吳文英（夢窓）・周密（草窗）という三人の詞人に関する論文をそれぞれ発表してきました。いよいよ「蘇辛」と並び称される辛棄疾（稼軒）のお話を今日聞かせていただけるということで、楽しみにしております。それでは先生、よろしくお願いいたします。

今日は一時から私の話が予定されておりまして、この日吉には来たことがないものですから、遅れちゃいかんと思つて昨日から東京に来て泊まっていたのですけれども、少し気分が悪くなって救急車で東大病院へ担ぎ込ま

れることになりました、大幅に遅刻してしまいました。お詫び申し上げます。今日のお話の枕に用意してきた言葉は、「命長ければ恥多し」、しかし長生きしていると嬉しいこともある、と。「恥多し」のほうは軽くて、「嬉しい」ことはずつしりと重く、とっておったんですが、歳をとるといرونな目にやはり遭うので、「恥多し」のほうもかなりな比重になってしまつて……。しかし今日は私にとつて嬉しい日には違いありません。

私は東北大学を退官するときに、「唐宋詩詞研究四十年」というたいそうな看板を掲げてお話しましたが、それから今年でちょうど十年になりました。四十年、五十年、というのは私が一九五三年に京都大学を卒業して大学院に入った年からいちおう研究生生活がスタートしたとしますと、退官の時がちょうど四十年であり、今年がちょうど五十年ということになるわけです。

私が卒業したのは五十年前ですが、卒業論文は「花間詞の声律」という題でした。詞学はやはり『花間集』から始める、という意識は、当時はなかつたんですが、後で考えてみれば、そうなつていたわけです。

さかのぼつてみますと、京都大学で卒業論文に「詞学」、詞をとりあげた最初の人は、おそらく間違いないと思います。吉川幸次郎大人でありまして、大正十四年か十五年だと思つたのですが（大正十五年、一九二六年卒）、卒業論文は「倚声通論」という題だつたそうです。年譜にも書いてあるはずですね。先生に見せてください、と言つたのですが、なくしてしまつたということです。その次はおそらく中田勇次郎先生です。昭和十年のご卒業ですね。帝国大学では、とくに吉川先生の時代は、文学部は東大と京大にしかなかったので、九大と東北大の法文学部というのが発足した前後に吉川先生は京大を卒業された、というタイムスケールになっていますから、おそらく学士論文としては吉川先生の論文が詞学の論文としては最初だつただらうと思います。

戦後は、たぶん私が最初だと思つていらつしやるかも知れないのですが、武部利男という方がおられまして、

昭和二十四年でしたか、戦後軍隊から復員されて復学された京大中文で「十八学士」という空前絶後の大量卒業生を出した年がありました。戦争中に学徒動員されて行かされた方たちが戻ってきて卒業となった……、武部さんはその一人です。卒論は何だったかというところ、辛棄疾、辛稼軒だったと聞いております。ですから卒業論文として考えると、私が知っている限りでは少なくともそのお三方がおられた。

しかし吉川先生はご承知のように、卒業後しばらくは『支那学』という雑誌に清朝の詞学のことなどをしきりに書いておられたのですが、そのうちに経学、注疏の学に進まれ、それから元曲、さらに八面六臂の活躍をされ、最後は杜甫の研究ということで、あまり詩余に関しては書かれなくなりました。二番目の中田勇次郎先生も、戦前、あるいは戦後の早い時期までは詩余の論文をいろいろ書いておられました。ご承知のように書道に造詣が深いもので、京大美大の教授から学長までされて、もっぱら書道史のほうで活躍されることになりました。早い時期の論文は、創文社の東洋学叢書の『読詞叢考』（一九九八）にまとめられておりますから、ご覧になっていかと思います。武部さんは卒論に辛棄疾をとりあげて、これは私はじかに聞いたので間違いないのですが、その後、詩余の論文は書いておられないと思います。李白に傾倒されて……。結局、京大の卒論の順番でいくと四番目になる私が五十年、しつこく続けておるわけです……。

もともと私ははじめから詩余専門と考えていたのではなくて、唐宋詩詞、詩と詞を総合的にとらえる視点があるはずだということでスタートしました。大学院入学の時に提出したテーマは「唐宋韻文文学研究」でした。しかしご承知のように日本では江戸時代以来、漢詩といえば唐詩と、代名詞になるくらい研究者も多いのに対して、詩余の研究が少ない。論文も日本で書かれたものは吉川先生や中田先生が比較的早い時期に書かれたものしかない、という状況でしたから、どうしても詩余にどんだんのめりこんで、結局、文学博士の学位論文も『宋詞研

究——唐五代北宋篇』ということで、のちに本にしました（創文社、東洋学叢書、一九七六）。

その学位論文ですが、提出した時は「北宋詞研究」という題でしたが、出版する時に題を改めたのは、当然、南宋篇を想定して、いずれやるという気構えでしたが、その後、大学で年を取ってきますと、教授会での序列があがって何やら委員だの評議員だのをやらされることになり、東北大の教養部から奈良女子大に移り、さらに東北大の文学部に戻る、という間に三つの教授会の評議員を務めております。そういうこともあつてなかなか研究に専念できないし、そのうちに出版社と縁ができて、これを書いてくれ、あれを書いてくれ、というのが舞い込んできて、日本漢文学まで首をつっこんだりして、詞学に打ち込むことが切れ切れになつてしまつて、いまだに南宋篇がまとまつておりません。王水照先生などからも会うたびに南宋篇はどうなつたと催促されておりますが、そのうちに、とごまかしているんです。けつして見限つた、あきらめたわけではなくて、いま紹介があつたように、姜白石、周草窓、呉夢窓の三人についてはいちおう論文を書いて、南宋篇をまとめる時には織り込むつもりでおります。あとは辛棄疾、これが何とかまとまらないことには南宋篇はできません。ずっと私の宿題になつて

いるんです。

辛棄疾が私にとって難しいいわけは、その詞をどのように位置づけるかということについてなかなかアイデアが浮かばない、ちよつと見えてきたような気がするので再開するのですが、もう一つには資料、文献が多すぎる。

崔海正の『宋詞研究述略』（一九九九、第七章「辛棄疾詞研究掃描」）を資料としてあげましたが、これは、かつて馬興榮先生が『詞学』に解放後の詩余研究の概観をまとめられていて（『詞学』第一輯、一九八一、「建国三十年来的詞学研究」）、それに続くものだと思います。ご覧のように、とくに解放後、大量の辛棄疾に関する論文・著書が出ました。八七年くらいまでに研究論文三百余篇、専著二十余种となり、さらにここ二十年の間に、研究論文百五十余

篇、著作十余種が出ました。これを全部読もうと思つたら、たいへんなことになります。辛棄疾は愛国主義、民族主義の英雄という位置づけで、その観点からの論文が少なくないわけですが、それには我々はあまり関心がないというか、むやみに辛棄疾を神様のように持ち上げるような態度は我々とは無縁なものですから、数の多さに幻惑される必要はないでしょう。玉石混淆の中から玉を選び出す眼が必要でしょうね。

辛棄疾に関する業績として私がいちばん尊敬するのは、鄧広銘先生です。プリントに鄧広銘先生のお写真と、先生の三部作といつていいと思いますが、『稼軒詞編年箋注』（一九五七、新版一九七八、増訂本一九九三）、『稼軒年譜』（一九四七、新版一九五七、増訂本一九九七）、『辛稼軒詩文鈔存』（一九五七、もと『稼軒詩文鈔存』辛啓泰原輯、鄧広銘校補、一九四七）を挙げました。更に鄧広銘輯校審訂・辛更儒箋注『辛稼軒詩文箋注』（二九九五）があります。これらによつて辛稼軒の基本資料はほぼ完璧に整理されていると言つていいと思います。

ただ、ひとつ注意しておきたいのは、鄧先生はもともと北京大学の歴史系の教授で、研究のいたるところにそれが活かされておりますが、戦前からずっと辛稼軒の研究に打ち込まれていまして、この三部作もそれぞれ一種類ではない、ということですが、『稼軒詞編年箋注』も、はじめ一九五七年に出ましたけれども、新版が一九七八年に、さらに増訂本が一九九三年に出しております。その後は出ていないと思ひますが、もし気がつきましたら教えてください。年譜も、最初一九四七年に出した、と一九五七年の序文に書いてありまして、一九四七年版を私に見ておりませんが、早い時期に年譜を出され、五七年にも出され、さらに増訂本を九七年に出されております。『辛稼軒詩文鈔存』も、もともと清朝の人（辛啓泰）が詩文を集めた『稼軒詩文鈔存』がありまして、鄧先生が校補をされて、民国三十六年、一九四七年ですから人民共和国以前です、日本の敗戦と人民共和国成立の間という時期に一度出されております。この本は私は偶然古書店で見つけて入手しました。さらにずいぶん校補を加えられ

て自信を持たれたのでしよう、辛啓泰原輯というのを取り去って、鄧広銘の名前で『辛稼軒詩文鈔存』、書名にもとの本の面影を残している、という感じです。ですから、ただちよこちよこと直したのではなく、それぞれかなり重要な修正があるので、古い版を持っていて安心されないように、ということです。

一例ですが、『辛稼軒年譜』で鄧先生は、辛稼軒の若い時、つまり済南にいたときは別として、南渡以後はほぼ毎年、辛稼軒がどこにいたか追跡されておられますが、五七年版には空白の三年間が残っておりまして。乾道元年（一一六五）から三年（一一六七）、二十六歳から二十八歳までの三年間、南へ来てからのことです。前年の隆興二年（一一六四）に江陰簽判の任が満ちて、乾道三年（一一六七）に建康府通判になるわけですが、その間が分からない。五七年版は、そこを空白の三年間としてありました。そこに目をつけたのが、蔡義江・蔡国黄の「辛棄疾漫遊吳楚考」（『北方論叢』、一九七九、のち『辛棄疾年譜』に附録、一九八七）で、面白いといえは面白いのですが、その間に金の占領地に潜入していたと詞を材料にして書いてあります。その詞の作品をよく見ますと、年代未詳の中に北方の風物らしきものが描かれている、だから北方へ行ったんだ、とやっちゃんわけで、私が東北大を退官する少し前、いまから十年ちよつと前ですが、これが出てきて講義の中で取り上げて、こんなむちゃくちゃなことはない、と、つまり空白の三年間であまり材料がないのを無理矢理こじつけて北地に潜入したなど、小説ならしいでしょうが論文としてはどうか、という話をしたことがあります。

鄧広銘先生はその後も執拗にこの問題を追っておられまして、『鉛山辛氏族譜』所収「稼軒歴仕始末」を見出されました。伝記は資料が第一ですが、やはり執拗に追いかけていくつかは突き当たる、という感じです。ついにこれを見つけれられ、そこに江陰簽判の後、広徳軍通判に改められた、とあります。地方官の任期は通常三年で、つじつまは合うわけです。面白いことに、一九九七年の増訂本で訂正されたのですが、蔡義江・蔡国黄の

論文には一言も触れられていない。見ていないはずはないのですが、そういう点も私は鄧広銘先生を尊敬しているんです。

レジメに載せた稼軒の墓の前に立つ鄧広銘先生の写真(巻頭写真1)は、私が撮影したもので、一九九〇年、この年は辛稼軒の生誕八百五十周年で、江西省の上饒で記念の国際研討会がありました。その時、会議のあと上饒からバスで鉛山まで、二百人くらい参加したでしょうか、辛稼軒のお墓参りをいたしました。バスと乗用車を連ねて、とんでもない田舎なんですよ、最後は田んぼ道を歩いてくれ、ということまで長い列になって、辛稼軒のお墓参りをしたわけです。この学会の時、かねて尊敬していた鄧広銘先生にお会いできて、非常に感激したんです。左の写真(巻頭写真2)は、今日のお話には関係ありませんが、皆さんもよくご存じの復旦大学の王水照先生、北京大学の袁行霈先生、蘇州大学の嚴迪昌先生です。ほかに葉嘉瑩先生なども見えておりました。

私は北宋詞研究でも、張先・蘇軾から周邦彥まで、総論と各論がありますが、各論もけっして個別的に書いているつもりはなくて、北宋詞の全体を有機的に把握することが、ある程度あの本はできていると思っています。南宋詞についてもそれをずっと考えていて、これもある、あれもある、という書き方はしたくないですね。突出したところを取り上げて、その間の有機的な連関というものを解明しながら南宋詞の全体を把握したいということ、一つにはそれがなかなかまとまらないで、いまに至ったということがあります。

辛稼軒を取り上げる際に、なんとといっても「豪放」という言葉がどうしてもキーワードみたいに行き渡っていますが、私がかねがね「豪放」「婉約」、しかもこれを派と称して両者の対立という形で宋詞を描き出すことに疑問を持っておりました。そんな単純なことではないと思いますし、「豪放」「婉約」という言葉も宋詞を総括する言葉ではないと思います。一九八三年のこと、文革後最初だったと思いますが、學術代表団の形で社会科学

院文学研究所の呉世昌教授が日本に見えまして、「蘇詞に関する若干の問題」という講演をされました。この講演は東京でされまして、私は聞いておりません。原稿を拝見する機会がありました。帰国後、『文学遺産』（一九八三年第二期）に「有関蘇詞的若干問題」を発表されました。要するに、東坡（蘇軾）の詞を豪放などと称するのはナンセンスだ、ということですから。さらに豪放派などどこにあるか、北宋には元来、豪放派など存在しない、というのが呉先生の論旨であります。それをもう少し敷衍して、「宋詞中の『豪放派』与『婉約派』」という論文を『文史知識』（一九八三年九月）に発表されました。

私は八三年十月に中国に戦後はじめて、というのは、私は引き揚げ者なのですが、引き揚げ以来はじめて文部省の在外研究を二ヶ月もらって、中国を回りました。最後に北京を訪れて文学研究所に呉先生を訪ねた時の写真（巻頭写真3）がそこに載せてあります。呉先生が北京のホテルに一席設けてくれたのですが、そのとき二人の若い学者をお供に連れてきて、それが現在ではそうそうたる教授になっておりまして、劉揚忠氏（現文学研究所教授）と施議対氏（現澳門大学中文学院副院長）のお二人です。このとき劉揚忠さんは呉先生の助手をしていました。文学研究所は大学院をもてるので、施議対さんは博士研究生だったんです。

プリントに、劉揚忠さんが八九年に出された『宋詞研究之路』を挙げておきました。この本は天津教育出版社というあまり聞いたことのない本屋から出ていて、目録でも見ませんし、日本にはあまり入ってきていないようなので、少し長いですが、今日の話に関係のある部分をプリントしておきました。要するに「豪放」「婉約」という二つの流れとして捉えるのは問題だ、ということ、当然ながら呉先生のことを大きく取り上げております。呉先生は大学ではなくて文学研究所におられたために日本ではあまり知られていないかも知れませんが、舌鋒鋭く、「有関蘇詞的若干問題」なども当たるを幸い、ばっさばっさと斬りつけております。要するに東坡の詞で豪



放など何首あるか、そういうことを言う人は東坡の詞などろくに読んでいないのだ、ということですね。三百余首の中で、「大江東去」というような詞は何首もありやしない、大方は繊細なデリケートな詞が多い、ということです。しかもああいう「大江東去」というような詞でも、豪放という言葉で表わせるかどうか、まして派とうからには仲間がいなくてはならないが、誰がいるんだ、秦觀か山谷か、これは詩余のほうではあまり結び付けて考えられていませんね。そういう調子で、北宋には豪放派などは存在しない、ということなんです。

呉先生の論文はあまり日本で取り上げられなかったと思いますが、古い雑誌は見るのがたいへんですが、しばらく前に呉先生が亡くなられてしまっていて、劉揚忠氏などが中心となって著作をまとめられました。『羅音室學術論著』の第二巻が「詞学論叢」です（中国文联出版公司、一九九二）。先に挙げました論文もその中に入っておりますので、ぜひご覧ください。雑誌に発表した後で手を加えられたようで、著作集のほうで見るほうがむしろいいかも知れません。

そもそも「豪放」「婉約」という言葉がどこから出てきたかを尋ねてみると、劉揚忠氏の論文にも引かれておりますが、明の張綆の『詩余図譜』に付してある凡例が、どうも最初らしい。張綆はあまり知られない人で、『詩余図譜』もあまり通行しなかった本ですが、それを王士禎が『花草蒙拾』で、「張南湖（張綆）の詞派を論ずるに二有り、一に曰く婉約、一に曰く豪放」と取り上げた。『花草蒙拾』は非常に影響のあった本で、この辺りが「豪放」「婉約」説の源流になったと思われれます。とくに戦後になりますと、辛稼軒が愛国詞人という肩書きを担わされて、「豪放詞」はいい、「婉約詞」はだめだ、という評価まで加わって、それこそ何百篇という論文のかなりがそう書いている。劉氏の『宋詞研究之路』はたいへん有用な本ですから、まだご覧になっていない方はぜひご覧ください。ガイドブック的な性格で、十数年前の出版なので少し古くなりましたが、従来の研究の概

括が書いてあります。そういう点ではさきに挙げた崔海正の『宋詞研究述略』も性格は似ていますが、一長一短ありますので、両方ご覧になるといいと思います。

今日のご挨拶のつもりで来ましたので、ほんの入り口ですが、とにかく「北宋に豪放派無し」という呉先生の論に私はおおむね賛成しておりますし、南宋におきましても「豪放」「婉約」ということでまとめることは難しい、というかできない、もう少し考えなければならんだろうと思っております。

前に姜白石の論文の終わりの部分でも、南宋詞の全体をどう捉えるかということに触れておりますが、あのと書きましたのは、ふつうは「姜呉」とまとめてそれを辛棄疾と対立させるのですが、どう考えても姜白石を「婉約」という言葉でくくることはできないと思います。辛稼軒と「姜呉」は質が違うということは、誰しも感じてもらえると思いますが、しかし考えてみると、姜白石と呉文英もかなり違う。辛棄疾との対立では一まとめにされただけでも、こちらの二人を取り上げてみると、ひどく違う。参考になるのは、清朝の周済の『宋四家詞選』です。これは四人だけを取り上げたのではなくて、四つの系列として取り上げています。周邦彦と辛棄疾と呉文英と王沂孫の四人を重要な作者として、その系列に属する詞人を十人くらいずつ挙げてあり、たいへん面白い本です。興味深いことに姜白石は、辛稼軒のグループに入っています。そこで、辛稼軒と「姜呉」を二分と考えずに、鼎立と考える、三つの対立と捉えたいのではないか、ということ姜白石の論文の中で書いております。やはり辛稼軒を単純に「豪放」とまとめることはしたくないので、南宋詞全体の中でどう位置づけるか、ということ、これまで書いた姜白石や呉夢窓や周草窓との関係の中で捉えていけば何らかのものが見えてくるだろう、と思っております。

そういうわけで今日のところは、大学でよく卒業論文の構想発表ということをやりますが（笑）、辛稼軒研究

の構想発表ということでお話をいたしました。(拍手)

司会：ありがとうございます。構想発表が、論文となって私たちが目にすることができずことを、心待ちにしております。

せっかくコピーしたのに触れなかったものがありますので、ちよつと補足しておきます。プリントでは呉世昌先生の写真の下に、王偉勇の『南宋詞研究』(一九八七)と趙仁珪の『論宋六家詞』(一九九九)があります。この二つは、呉先生の主張があるにも関わらず、いまだに「豪放」「婉約」派があることを前提としているんです。例えば王さんののは、「詞に固より豪放・婉約の分あり」と始まつちやうんです(笑)。王さんには二回ほど会ったことがあり、たいへん愉快な人で、個人的には好きなんです。このくだりは絶対に承服できません(笑)。趙さんのものもだいたい同じで、蘇軾が豪放の開祖で、辛稼軒で完成の域に達した、と書いています。ですから、やはりまだまだ「豪放」「婉約」に惑わされて宋词研究がゆがめられていると思うのです。

司会：では、この後、懇親会もありますので、この辺で終わりにしたいと思います。先生、どうもありがとうございます。(拍手)

二〇〇三年九月二十日 第一回宋词研究会

於慶応義塾大学日吉キャンパス中会議室